令和4 年度

授業改善推進プラン

[成果と課題]

文京区立本郷台中学校

令和４年度

授業改善推進プラン評価表（成果と課題）

第１学年

<table>
<tr><th></th><th>成　果　と　課　題</th></tr>
<tr><td>国語</td><td>○国語に対する基本的な知識を身につけさせながら、百人一首大会や席書会を実施することで、日本の伝統文化など国語に親しみながら学習を深めることができた。
○調べる学習や意見発表、グループワークなど様々な学習活動を等して主体的に学習しようとする態度を養うことができた。
●粘り強く学習に取り組むためのファイリングや振り返り、相互評価など継続的・計画的に学習に取り組むための学習環境作りをさらに推進していく必要がある。</td></tr>
<tr><td>社会</td><td>○生徒の意見や感想からは、年度当初に示した「世の中のこと＝社会の現実に目を向け、それをひとごとではなく自分の問題にしようとすることで、主権者意識の醸成につなげていく」という目標が概ね達成できたことが読み取れる。
○授業内では、具体性や切実さのある教材を通して学習者の主体に働きかけることで、生徒自身からの疑問や追究を生み出すことができた。また、グループワークや討論学習、「社会科通信」での意見や考えの共有等を通して、自らの意見と異なった見解に触れさせることで、他者とのつながりの中で自分の考えを発展させることができた。
●授業評価アンケートでは、「自ら進んで挙手、発言している」という質問に「あてはまる」の割合が５割程度にとどまった。
●授業進度が速いと感じている生徒が少数いることが分かった。今後も、基本的な知識・技能の確実な定着を図る時間を確保するようにする。</td></tr>
<tr><td>数学</td><td>単元テストと定期考査合算の正答率（数値は%）
<table>
<tr><th></th><th>基礎</th><th>標準</th><th>発展</th></tr>
<tr><td>知識・技能</td><td>５３．６</td><td>７３．３</td><td>８８．７</td></tr>
<tr><td>思・判・表</td><td>３０．３</td><td>５０．１</td><td>６７．９</td></tr>
</table>
○基礎コースの知識・技能に関する正答率は、50%を超え、習熟度別指導で正負の数、文字式、一次方程式の計算演習を増やし、用語の意味を徹底して確認して、演習を取り組ませてきた成果が表れたといえる。
●基礎コースの思考力・判断力・表現力については、半分を下回り、基本事項を身に付けてから、自ら考える力を育成することが課題である。
○標準コースの知識・技能に関する正答率は、目標値である 60%を 10%以上向上した。四則計算、方程式、文字式、関数などの数量分野について基礎基本を徹底しながら、基礎基本を徹底しながら、発展的な内容にも取り組ませた成果が表れたといえる。また、思考力・判断力・表現力の正答率が 50%以上となり、思考力を養う演習をこまめに取り入れ、グループで課題解決学習をする機会をつくった成果が表れた。
●発展コースの思考力・判断力・表現力に関する正答率は７０％を下回った。習熟度別授業で、単元毎に思考力を高める例題を多く準備し、自力解決・グループ学習を反復して行い、課題解決型授業を実践していく必要がある。また、思考・判断・表現力を高める小テストも実施していき、習熟を図っていくことが必要である。</td></tr>
</table>

理科	○実験・観察をできる限り多く取り組ませることにより、生徒の興味関心を高めながら学習意欲につなげることができた。授業評価は１学期、２学期ともに９５％程度の生徒が授業方法について肯定的な評価をしていた。重点を置いて取り組んでいる実験プリント作成については、予想→実験→結果→考察の流れを理解し、その思考過程を言語化できる生徒が増えてきた。 ○定期考査については１学期よりも取組状況が改善され、しっかりと準備をした上でテストに臨み、正答率を上げようとする生徒が増え、平均点も上がってきた。 ●実験観察を多く取り入れた授業の中で、結果をもとに話し合い活動を行ったが、授業進度の関係から十分に時間を確保することはできなかった。結果をもとに考察する活動は科学的思考を育てる上で非常に大事な過程であるので、今後も継続して授業で取り組ませ、思考力を育てていきたい。 ●実験プリントの作成については思考過程を言語化できる生徒が増えた一方で、既習事項をもとに自らの考えを構築することや言語化することを苦手とする生徒は一定程度おり、個別対応が必要と感じる。実験時には理科支援員のサポートを手厚くしたり、プリント返却時に個々へアドバイスを加えたり、他者のプリントを参考にすることも伝えているが、なかなか改善されてこないのが現状である。 ●知識の定着については正答率が上がってきたものの、十分とは言えない状況であるので、単元テストや小テストなどの結果もさらに生徒にフィードバックしながら進めていく。また、意欲的に発言や発表をしている生徒の割合は８０％程度にとどまっており、固定化されている現状がある。さらに全体の興味関心を高めたり、知識の定着をはかって自信をつけさせたりすることで、今後改善をはかりたい。
音楽	○歌唱では、パートリーダーの育成や自己評価を含めた指導を行うことで、生徒が意欲的に取り組み、技能を高められた。また今年度は、少人数グループでの話し合い活動を増やしたことにより、より表現力が高められた。 ○器楽では、三味線を行い、日本独自に発展してきた音楽に興味深く取り組んでいた。回数を重ねるごとにできる喜びや達成感を味わわせることができた。また、専門家による実技指導を行い、表現活動との関連を図った。 ○創作では、ヴォイスアンサンブルをもとに自分たちで強弱や速度等を工夫し、授業内発表会に向けてグループでお互いを高め合った。また、発表会では相互評価を行い比較することで、お互いの良さを確認した。 ○鑑賞では、日本の伝統音楽や独唱曲、協奏曲、映画音楽など幅広い分野の音楽を鑑賞し、表現活動と関連させたカリキュラムで指導を行った。紹介文は定型文を習得させることで、徐々に自分の思いや意図を言葉に表せるようになった。 ●課題としては、支援を要する生徒の指導について、授業進行の速度や教材の選択などを工夫し改善を図っていく。
美術	○「図画工作」から「美術」への学びに生徒たちはおおむね意欲的に移行できた。 ○ＩＣＴを活用して表現活動の基礎・基本となる技法を学習し、発想、構想を重視する制作を展開することができた。また鑑賞の授業にも多くの作品を紹介することができ、これにより美術作品への関心を広げることができた。 ●クラスによって集中して制作に取り組む姿勢に差があり、一斉授業では制作進度の遅れがみられる。特に遅れが著しい生徒に関しては放課後に支援の機会を計画的に設定し、制作進度の遅れを補いたい。特別な支援が必要な生徒に関しては、学習支援員との連携を図り、学習意欲を引き出し、制作の意欲の定着を図っていく。 ●グループ学習がコロナ渦の対応でほとんど実施できなかったので、今後は鑑賞や制作中の意見交換など言語活動の場面を増やす機会を充実させていきたい。

保健体育	○模範や学習カード、アクティブボードやタブレット等を活用し、視覚的にアプローチしたり、ペアやグループ活動を積極的に取り入れたりすることができた。授業評価アンケートで「先生は授業でわかりやすく教えてくれたり、よく考えさせてくれたりしている」に「あてはまる」と答えた生徒が 84.5%、「おおむねあてはまる」が 14.1%だった。 ○グループ活動を多く取り入れたことにより、互いに声を掛け合いアドバイスをし合うなどの場面が増えてきている。今後もグループ活動を主軸として、仲間と協力して取り組める環境を作っていく。 ●教員だけでなく、体育係の号令や指示で集団行動できるようにすることが課題である。また、配慮が必要な生徒に対して、周りの生徒が声をかけ、教えてあげることができるように指導することも課題である。
技術・家庭	＜技術分野＞ ○木工作品の製作では、「技術の見方・考え方」を働かせて、生活の中から問題を発見して、自分で製作品を決定した後、けがきから材料取り、部品加工、組み立て作業まで、協働しながら取り組めるように、同じような作品を製作する者で班をつくり実習を行った。授業の終わりに、振り返りシートを記入することで、学習の過程や自分の取り組み方を把握できるようにした。 ●１学期の生徒授業アンケートでは、創造性の項目以外はどの項目も「あてはまる」「おおむねあてはまる」の合計が９０％台であった。２学期のアンケートでは、協調性の項目は「あてはまる」「おおむねあてはまる」の合計が９０％台であったが、その他の項目では８０％台に下降している。ルーブリックの各項目の内容をていねいに説明するとともに、わかかりやすい授業ができるように授業内容を工夫していく。 ＜家庭分野＞ ○衣生活、住生活の学習では、実生活に活かせる課題を取り入れ、家庭で実践しワークシートにまとめた。熱心に取り組む生徒が多く授業の内容の定着が図れた。 ○食生活の学習で給食の献立を考え、夏休みの課題で調理をし、２学期にグループごとに発表し合う活動をした。各グループが意見を出し合い、各クラスから給食で実食できる献立を決定・発表したが、積極的な学習の展開を見ることができた。 ●実習した内容をまとめたワークシートを発表しあい意見を出し合う活動が、コロナ禍に配慮してできなかったので、今後、発表できる機会を増やしていくことが課題である。 ●被服製作では、基礎技術の習得に差があり、作業に遅れる生徒が出てしまった。 ●個別や少人数の指導や補習の時間を確保することが課題である。
英語	□教科書で扱うトピックや身近な話題については、教師から質問に対して１～２文のフルセンテンスで応答しようとする態度が向上している。また、学習した文構造がの種類が増えるにつれて、絵や写真の様子について１～２文で描写する力が身に付きつつある。 ■学習した文構造の種類が増えて表現力が向上する一方、現在形と現在進行形など、複数の文構造を混同すること見られた。話すこと、書くことの活動で適切な文構造や語彙を選択することに困難さ感じる生徒が見られる。既習の文構造と意味や形を対比させて学習させることが課題である。 □教科書本文等を模範にして、学習した語彙を活用しながら、まとまった内容を 20 語程度で書き表すことができつつある。 ■中学生の思考力に英語力が追い付かず、話したり、書いたりすることが思うようにできない生徒が多く見られる。平易な語句で表したり、パラフレーズしたりするスキルを身に付けさせることが課題である。 ■教科書の理解、言語活動をとおして、多くの語彙に触れる機会はあったが、小学校外国語科で学習した語彙については、生徒によってその定着度、認知度には大きな開きが見られた。中学校入門期における語彙指導はゼロ地点からスタートすることが必要である。

令和４年度

授業改善推進プラン評価表（成果と課題）

第２学年

	成　果　と　課　題
国語	○提出課題においては、良かった生徒の作品やまとめ方の参考になる物を提示し、視覚的にアプローチしたことで具体的な取り組み方がわかり、質が上がった。また、調べる学習コンクールに取り組み、図書とデータを併用することで、分析力や考えの広げ方が身についた。 ○話し合い活動の際に型を用意したことで、「話し合うこと」について考え、議題への内容に深まりが生まれた。また、意見を交流する中で、自分の考えをより深めることができた。 ●振り返りの十分な時間確保ができなかった。そのため、振り返りが次の活動に生きないことが多く、「振り返る力」を伸ばしきれなかった。
社会	○基礎基本の定着を図る小テストでは学年平均が約 75%であり、徐々に基礎基本が定着しつつある。定期考査は、一学期期末が平均 53%の正答率から始まり、二学期以降はいずれも 65%以上の正答率を超えるようになった。学習に向き合う姿勢が向上した。 ○少人数グループのアクティブラーニング型の授業が定着し、活発に意見を交わしている。授業評価アンケートでも授業者に関する項目は、進度以外はＡ評価がいずれも 90%を超えており、生徒自身に関する項目も規律面では概ねＡ評価が 90%を超えている。授業形態が定着し、意欲的に授業に臨んでいる。 ●定期考査では知識・技能の正答率が約 80%前後に向上した一方で、思考・判断・表現の正答率が約 60%前後となっており、課題である。 ●授業評価アンケートにおける計画性に関する項目のＡ評価が約 50%、振り返りに関する項目もＡ評価が約 65%となっている。家庭学習で日常的に社会科を学習する時間が確保されておらず、定期考査間近に提出物などに取り組む生徒が多く、繰り返したり反復したりする時間が確保されていないと推察できる。また、授業進度に関する項目では、Ａ評価が 67%となっており、早いと感じている生徒がいる。現在のペースで進むと三年時の受験期の一か月前には全範囲が終了する計画であり、そこで徹底的に総復習と演習する時間を確保したいと考えている。
数学	○基礎基本の定着を図ることと学習を計画的に進める習慣をつけるため、ワークや単元プリントを単元末や定期考査前に課題として取り組ませ、細かく点検し、具体的な評価を示した結果、途中の過程を丁寧に記述する生徒や誤答をしっかり解き直す生徒の割合が増えた。 ○単元テストや定期考査の解き直しをさせることで、苦手な問題や複雑な解法の問題にも粘り強く取り組むようになってきた。 ●１年間で実施した単元テストと定期考査合算の正答率を学年全体で観点別に割り出すと、知識・技能が 62.8%、思考・判断・表現は 44.8%となっており、知識・技能の正答率を上げるためには、基礎コースの生徒を中心に計算技能や図形の性質を活用しながら問題解決できる力をつけていくことが必要であると考えられる。また、思考・判断・表現の力を向上させるためには、習熟度に応じた各単元の応用問題と数の性質や図形の証明問題をくり返し取り組ませることが大切であると考えている。

理科	○実験・観察をできる限り多く取り組ませることにより、生徒の興味関心を高めながら学習意欲につなげることができた。授業評価は１学期、２学期ともに９５％以上の生徒が授業内容について肯定的な評価をしていたので、今後も継続していきたい。 ○重点を置いて取り組んでいる実験プリントについては、予想→実験→結果→考察の流れを理解し、その思考過程を言語化できるようになってきた。また、実験結果を分析し、科学的な根拠をもとに自らの考えを発表することができる生徒も増えた。 ●実験観察の中で、結果をもとに話し合い活動を行ったが、授業進度の関係から十分に時間を確保することはできなかった。結果をもとに考察する活動は科学的思考を育てる上で非常に大事な過程であるので、今後も継続して授業で取り組ませ、思考力を育てていきたい。また、各個人のタブレット端末の活用はそれほど頻繁に行うことはできなかったので、来年度以降の課題としたい。 ●実験プリントの作成については思考過程を言語化できる生徒が増えた一方で、既習事項をもとに自らの考えを構築することや言語化することを苦手とする生徒は一部おり、個別対応が必要と感じる。実験時には理科支援員のサポートを手厚くしたり、プリント返却時に個々へアドバイスを加えたり、他者のプリントを参考にすることも伝えているので、今後も継続して行っていきたい。
音楽	○歌唱では、パートリーダーの育成や自己評価を含めた指導を行うことで、生徒が意欲的に取り組み、技能・表現を高められた。 ○創作では、反復・変化・対照をもとに、リズムを創作した。授業内発表会を設け、グループで協力しながら自分たちなりの表現で演奏することができた。 ○鑑賞では、オペラや交響曲など表現活動と関連させたカリキュラムで指導を行った。また、伝統音楽である歌舞伎では、音楽だけでなく隈取を描かせることにより、さらに興味を増した。 ●課題としては、前半は男子の一部に歌うことへの抵抗や恥じらいがあり、大きな声で歌えずにいた。後半からは歌えるようになったが、男子・アルトの発声が崩れてしまうこともあるため、今後はパート別で細かく指導し、響き方を習得させていく。
美術	○1 年次の基礎基本的学習を今後の学習に関連づけられるようにしていく。 ○ICT、等の活用で身近なことから興味が広がるよう資料を生かすことができた。 ●授業アンケート「計画性」「粘り強さ」では「あてはまる」層の割合が半数にとどまった。「第３観点」について他教科と同一歩調するとともに教科の特質に応じて生徒の発達段階や一人ひとりの個性を十分に考慮しながら他の「第１観点」「第２観点」の状況を踏まえた上でさらに評価材料を工夫する。 ●鑑賞授業ではグループ学習の時間確保に努めることができたが表現活動ではグループ活動をどのように組み立てるかを考え、言語活動を充実させたい。
保健体育	○模範や学習カード、アクティブボードやタブレット等を活用し、視覚的にアプローチしたり、ペアやグループ活動を積極的に取り入れたりすることができた。授業評価アンケートで「先生は授業でわかりやすく教えてくれたり、よく考えさせてくれたりしている」に「あてはまる」と答えた生徒が 82.6%、「おおむねあてはまる」が 15.9%だった。 ○グループ活動を多く取り入れたことにより、互いの課題やよさをみつけ、アドバイスしたり課題解決に向け協力したりする姿勢がみられた。また、配慮が必要な生徒に対しても、周りの生徒が声をかけ、教えてあげることができた。今後もグループ活動を主軸として、仲間と協力して取り組める環境を作っていく。 ●運動が得意な生徒が発言することが多かったので、今後は運動が苦手な生徒も積極的に発言できるよう発問や場の工夫、さらに個々への助言をしていく。

技術・家庭	＜技術分野＞ ○ラジオ、センサー回路、動く模型の製作では、お互いに学びあい、教えあいながら活動ができるように、３～４人で班をつくり実習を行った。授業の終わりに、振り返りシートを記入することで、学習の過程や自分の取り組み方を把握できるようにした。２学期末の生徒授業アンケートでは、計画性、粘り強さの項目で、「あてはまる」が１学期末８０％台から９０％台へ、振り返る力の項目で、７０％台から８０％台へと上昇した。また意欲の項目で、２学期末のアンケートでは否定的な返答は無かった。 ●定期テストの正答率が１，２学期とも５０％台であった。基本的な知識、技能の定着が課題である。ワークシートの改良やわかかりやすい授業ができるように授業内容を工夫していく。 ＜家庭分野＞ ○栄養素の学習で毎日の食事が成長や健康維持にいかに大切であるかを理解し、良い体つくりを意識しながら、朝・昼・夕食の献立作成の課題に取り組む生徒が多くみられた。 ○ICT を活用し、調理の基礎技能を動画で見て学習し、野菜の切り方や調理道具の扱い方を理解することができた。 ○コロナ禍により、実際の調理実習が行えなかったが、夏休みと冬休みに調理の課題を実践させることで技術の向上を図った。 ●今後も体験学習の内容を検討し、できる限り実行していくことが課題である。 ●消費の分野の学習では、キャッシュレス化、クレジットのしくみ、詐欺被害の防ぎ方などを学友したが、知識を実生活では生かしずらい年齢のため、関心を高められる授業を工夫することが課題である。
英語	□教科書本文やその同等レベルの英文であれば、書かれた内容についての大まかな要旨を把握できる生徒数が増えてきた。また、さらに詳細な情報を概ね把握できる生徒数も増えてきた。英語を日本語の語順に置き換えるのではなく、英語の語順に沿って前から順番(チャンクで)に意味をとっていくことに徐々に慣れてきつつある。 □文構造の理解において、イラストや写真などの視覚効果のある教材を使うことでオーラル表現の機会を増やし理解を深めさせることができた。 ■30 語以上の語数の文は、助言を受けながらであれば、徐々に書けるようになってきたが、その内容につながりやまとまりのある文章を書く際に必要な発想力がやや不足している点と、絶対的な語彙数の不足が感じられた。難しい表現は簡単な言い回しや、簡単な単語や表現に置き換えたりする発想力を身に着けさせることや英語圏の歴史や文化をより深く知ることが求められる。 ■聞くことにおいては、小学校から教科として英語を学んでいる点が一助となり、全体的に長けていると感じられるが、英語独特の音のつながり「リエゾン」を理解できればさらに聞き取り能力の向上が見込まれる。この点をいかに身に着けさせるかが課題である。 □音読活動については積極的に取り組みことができた。教科書の対話文の音読では、スピード感にはやや欠けるが、その場面に沿った感情移入をしながら音読活動ができる点は評価できる。 ■日々の家庭学習習慣にはばらつきが見られた。課題をこなしてこない生徒ほど学習定着度が低く、この点を平準化し、基礎学力の向上をいかに図るかが課題である。 □プレゼンテーション活動へは積極的に取り組み、友人と協力しながら間違いを恐れず発表活動を行うことができるようになった。

令和４年度

授業改善推進プラン評価表（成果と課題）

第３学年

	成　果　と　課　題
国語	○単元の導入時に丁寧なガイダンスを行うことで生徒自らが課題を意識して学習活動を行うことができるようになった。 ○日々のグループワーク、スピーチ、小論文など主体的で深い学びにつながる学習活動を展開することで、思考力と表現力を養うことができた。 ●課題に対して計画的に取り組もうとする姿勢は見られるようになったが、振り返りの時間を十分にとることができなかった面があり、「振り返る力」については伸ばしきれなかった。
社会	○生徒の意見や感想からは、年度当初に示した「世の中のこと＝社会の現実に目を向け、それをひとごとではなく自分の問題にしようとすることで、主権者意識の醸成につなげていく」という目標が概ね達成できたことが読み取れる。 ○授業内では、具体性や切実さのある教材を通して学習者の主体に働きかけることで、生徒自身からの疑問や追究を生み出すことができた。また、グループワークや討論学習、「社会科通信」での意見や考えの共有等を通して、自らの意見と異なった見解に触れさせることで、他者とのつながりの中で自分の考えを発展させることができた。 ●授業評価アンケートでは、「自ら進んで挙手、発言している」という質問に「あてはまる」の割合が６割程度にとどまった。 ●授業進度が速いと感じている生徒が少数いることが分かった。今後も、基本的な知識・技能の確実な定着を図る時間を確保するようにする。
数学	○生徒の習熟度に応じた少人数授業を展開している。ウォーキングコースでは，教科書に応じた基礎的なプリントを用いた授業の展開を通じて，意欲的に課題に取り組む生徒が増えた。スタンダードコースでは，教科書の問いの類題プリントを用いて，反復練習する中で，基本の定着を図ることできた。また，ランニングコースでは，入試問題などの発展問題にも取り組み，思考力・判断力・表現力を養う授業を展開することができた。 ●自分自身で粘り強く取り組もうとする意欲は感じられる一方，クラス全体での発表の積極性や意見交換に課題が残った。今後も，数学的活動の充実を図っていく。 ●自力解決できない問題に対して，あきらめてしまう生徒が多いのが課題である。教員へ質問する時間や生徒間で教え合う時間をさらに確保していく。 ○単元テスト後や定期考査後に間違い直しレポートを課し，自身の学習への取り組みを振り返られるようにした。問題を解決するために必要な知識や考え方を明確に記述させる中で，生徒が気づきを得られ学習を深めることに活用することができた。ワーク等の普段の提出物でも，自分が「なぜ間違えたのか」「どこを理解すればよいのか」を主体的に考えるようになった。
理科	○授業のＯＰＰＡや自己のふり返る活動を重点に取り組ませたことで、課題に対する自らの学習をふり返る時間を確保するとともに、その課題について一人一人にフィードバックすることで自らの学習を調整する力を育てることは概ねできた。生徒の授業アンケートでも 95%の生徒から肯定的な評価を得ることができた。 ○実験やグループ活動、演習にできる限り取り組む時間を増やす中で、ＩＣＴ機器を活用し、対話的な学習活動を充実させ、生徒一人一人が粘り強く課題に取り組む姿勢を大切にしたことで、単元テストや定期考査で「知識・技能」の定着を確かめることができた。

	○実験・観察をできる限り多く取り組ませることにより、生徒の興味関心を高めながら学習意欲につなげることができた。また、教員が提供する資料等は授業を進める上で効果的なものかという評価では100%を達成させることができた。 ●実験結果や課題に対して、意見や考えを共有したり解決したりする機会を増やしたが、「思考・判断・表現」の定着について生徒の定着度の差が大きく広がってしまったことが単元テストや定期考査で読み取れているので、個別な対応等も必要と考えられる。 ●実験プリントや演習問題の作成については、思考過程を言語化できる生徒が増えた一方で、既習事項をもとに自らの考えを構築することや言語化することを苦手とする生徒は一部おり、個別対応が必要と感じる。次年度もできる限りグループ活動や少人数での対話的な活動が増やせるように対応していきたい。
音楽	○歌唱では、パートリーダーを中心とした話し合いや自己評価を含めた指導を行うことで、生徒が意欲的に取り組み、技能・表現を高められた。 ○器楽では、楽器ではなく紙コップ（CUPS）を使いながら、音楽に合わせリズムを刻めた。また、ギターにも挑戦し、３つのコードを習得した。 ○創作では、言葉の抑揚や言葉の語呂を考えながら作詞をし、その過程で作詞者の思いや、詩の中の隠されたメッセージについて考えを深められた。○鑑賞では、オーケストラやそこで使用される楽器の響きを確認することができた。また、雅楽・狂言・能など、日本の伝統文化に触れることで、日本独自に発展してきた音楽に興味深く取り組んだ。 ○全体的に表現活動に意欲的に取り組めた。自分だけでなく、他者の考えもきちんと受け止め、曲に適した表現の工夫を試行錯誤しながら導き出せた。
美術	○ICT、等の活用で身近なことから興味が広がるよう資料を生かすことができた。 ●授業アンケート「計画性」「粘り強さ」では１年次より向上したが「当てはまる」層の割合が半数を超えるにとどまった。「第３観点」について他教科と同一歩調するとともに教科の特質に応じて生徒の発達段階や一人ひとりの個性を十分に考慮しながら「第１観点」「第２観点」の状況を踏まえた上でさらに評価材料を工夫する。 ●表現活動ではグループ活動を組み込み「コミュニケーション能力」や「協調性」の利点を生かして「主体的な学習」につなげていくことが課題である。
保健体育	○模範や学習カード、アクティブボードやタブレット等を活用し、視覚的にアプローチしたり、ペアやグループ活動を積極的に取り入れたりすることができた。授業評価アンケートで「先生は授業でわかりやすく教えてくれたり、よく考えさせてくれたりしている」に「あてはまる」と答えた生徒が 89.3%、「おおむねあてはまる」が 10.7%だった。 ○グループ活動を多く取り入れたことにより、互いの課題やよさをみつけ、アドバイスしたり課題解決に向け協力したりすることができた。また、一人一人が目標を立て、その達成に向けて主体的・意欲的に取り組むことができた。 ●部活動を引退し、受験シーズンに入ると体力の低下がみられたので、個々にできる補強トレーニング等を更に工夫し、体力の維持・向上を図っていく。
技術・家庭	＜技術分野＞ ○情報の技術では、個人で解決する課題の後に、７人で解決する課題に取り組ませた。学びあい、教え合いながら、協働してプログラムの作成ができるように場面を設定した。授業の終わりに、振り返りシートを記入することで、学習の過程や自分の取り組み方を把握できるようにした。２学期末の生徒授業アンケートでは、意欲、粘り強さ、振り返る力、創造性の項目において、否定的な返答は無かった。 ●双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決については、十分に時間を取ることができなかった。各単元にかける時間のバランスに留意していく。 ＜家庭分野＞ ○コロナ禍のため、保育実習をできなかったため、授業で修得した知識を体験で定着

	できる機会がもてなかった。ICT を活用し、動画で幼児の成長や発達を見たことで理解できた生徒が多かった。 ○幼児のおもちゃの製作では、工夫を凝らした作品を作りたいと意欲的に取り組む生徒が多く、表現力や創造力の向上が図れた。 ●保育実習や調理実習など体験学習の内容を検討し、状況に合わせながらできる限り実行していくことが今後の課題である。
英語	□教科書本文など、書かれた内容の要点を理解する力が向上している。リーディングの指導方法の改善により、「和訳を理解することと」誤解している生徒は当初より少なくなっていると感じる。また、使用する教科書以外のまとまったパッセージに触れる機会が多くなり、要点を捉えて読むことに慣れてきた。 ■英語を読む活動に必要な語彙力が不足することで、まとまったパッセージの理解が十分にできない生徒が見られた。英文と日本文を左右で対比させて読ませる方法は、効果的ではなく、和訳により内容をつかませて英文にアプローチさせるなど、さらにリーディングの指導に改善が必要である。 □読んだ内容について、絵や写真を使いながら再話（retelling）する活動により、内容理解を深めさせることができ、基礎的な語彙の定着にもつなげることができた。 ■教科書以外の様々な場面の絵や写真を使って、描写（describe）させる活動が不足した。発話に慣れさせるための、短時間の言語活動の開発が課題である。 □教科書本文の音読筆写、文構造・語彙に関する副教材（ワークブック）の家庭学習の課題を、ほぼ毎授業で提示し、次時に教師が個別に点検・確認することで、英語の家庭学習の道筋が明確になり、学習する習慣の定着と基礎学力の向上につながった。 ■音読の家庭学習においては、音声教材として学習者用タブレットにある生徒用デジタル教科書活用が望ましいが、活用率が高くなかった。音読筆写の指導に活用できるように、学習方法を具体的に提示すること課題である。